荒尾南遺跡の砥石

調査課　吉田　靖

考古学コラム「きずな」No. 8
平成 27 年２月２日
岐阜県文化財保護センター

＜はじめに＞

砥石は一見地味な遺物ではありますが、とりわけ鉄器を使い続けるためには欠くことのできない道具といえます。平成１８年から平成２３年まで発掘調査を実施した荒尾南遺跡では、約８６０点もの砥石が出土しました。これは石器類全体の42%を占め、最も頻繁に使用された石器といえます。このことから、荒尾南遺跡の人々の生活を復元するうえで、砥石はカギとなる遺物の一つであると考えます。

当遺跡で砥石が盛んに使用された時期は、弥生時代後期から古墳時代前期とみられます。その時期の遺構が濃密に分布する荒尾南遺跡Ｂ地区での砥石の様子を紹介したいと思います。ちなみにＢ地区では砥石が４５６点出土し、これは遺跡全体の約５３％を占めます。

荒尾南遺跡で出土した砥石

＜遺跡のどこから出土するか＞

荒尾南遺跡の発掘調査によって分かってきた当時の景観を簡単に説明します（図１）。西側は自然流路が北から南へ流れ、東側は南北方向に大溝が貫流し、両者の間が微高地になっており竪穴建物を多数営みます。大溝の東側は地形が低く、水田が展開しています。

図２では、大まかな砥石の分布について５ｍ方眼の区画ごとに点数を表しました。砥石はＢ地区全体に散漫に分布するのではなく、偏りが認められます。その偏りは特に建物の密集域と重なることが分かります。

＜そこで何が行われたのか＞

砥石に刻まれた断面Ｖ字状の溝や線状痕は、鉄器の研磨に使用されたことを物語っています。鉄器研磨の工程は砥面の粒度で分けられています。例えば、粗い粒度の「置き砥石」と呼ばれる大型のものは成形や粗い仕上げに、「手持ち砥石」と呼ばれる小型のものは粒度に応じて刃の微調整や再生に、という具合です。

断面Ｖ字状の溝をもつ砥石（凝灰質砂岩製）

当遺跡では、砥面の粒度が最も粗い砂岩製が約３分の２で最多となり、数は少ないですが、粒度が緻密な凝灰岩製や凝灰質砂岩製のものも見られます。

「置き砥石」はその重さから、当時使われた場所から動かずに出土している可能性が高いと思われます。砥石の重さで分布をみると図３のようになり、「置き砥石」は建物密集域に多く分布しています。また、この区域に凝灰岩製や凝灰質砂岩製の「手持ち砥石」が分布していることも分かっています。この状況から、建物に固定された大型の砥石を使って鉄器の粗い仕上げ作業を行い、小型の砥石で細かな鉄器の調整や研ぎ出しを行う姿が思い浮かびます。

また、「手持ち砥石」は、自然流路や大溝周辺でも多く出土しています。この状況から、水辺での鉄器の研磨に「手持ち砥石」が使用されたとも考えられるのではないでしょうか。荒尾南遺跡の「手持ち砥石」の使われ方は、今から３０～４０年ほど前の機械化が進む前の稲刈りや草刈り時に、農村の各所で見かけた風景からその答えが見つかるかもしれません。鎌を研いだ後、用水の傍らに置かれたままの砥石を各所で見ることができました。

＜おわりに＞

荒尾南遺跡Ｂ地区で出土した石器類は、４５６点の砥石に次いで叩石が２１１点出土しています。叩石は長めの亜角礫や長楕円礫の端部を利用したものがあり、当センターでは、「手で握って平滑な石材に向かって垂直にたたき続けると、平滑な石材には無数の敲打痕が形成される」という実験結果を得ています。この結果から、端部を利用した叩石の用途の一つに、砥石の砥面を再生したことが想定されます。

砥石もまた使い続けるために修理が必要です。叩石でたたいてキズをつけることで、砥面を再生して使い続けることができます。鉄器を使い続けるために砥石を用い、砥石を使い続けるために叩石を用いて、道具を再生しながら大切に使用した当時の人々の姿が見えてくるようです。

＜参考文献＞

櫻井拓馬2011「伊勢湾沿岸における弥生後期の石器と鉄器」『伊勢湾岸弥生社会シンポジウム・後期編　伊勢湾岸域の後期弥生社会』
岐阜県文化財保護センター 2014『荒尾南遺跡Ｃ地区』

別紙　図１　荒尾南遺跡における弥生時代後期～古墳時代前期の主要遺構分布図

別紙　荒尾南遺跡Ｂ地区における砥石の分布状況　（砥石が出土したグリッド（５ｍ×５ｍ）を塗りつぶしてあります）

図２　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構を重ねてみると・・・

（砥石の点数は、出土したものすべてを表示してあります）

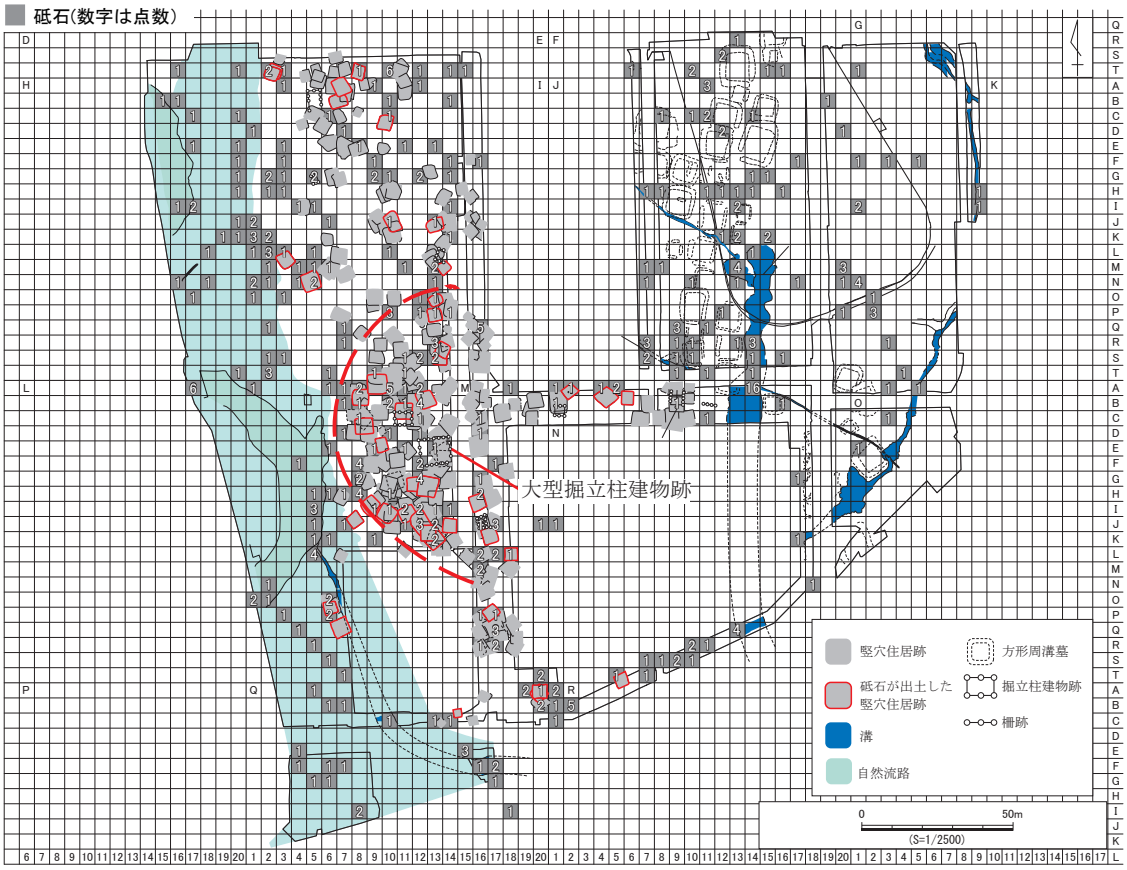
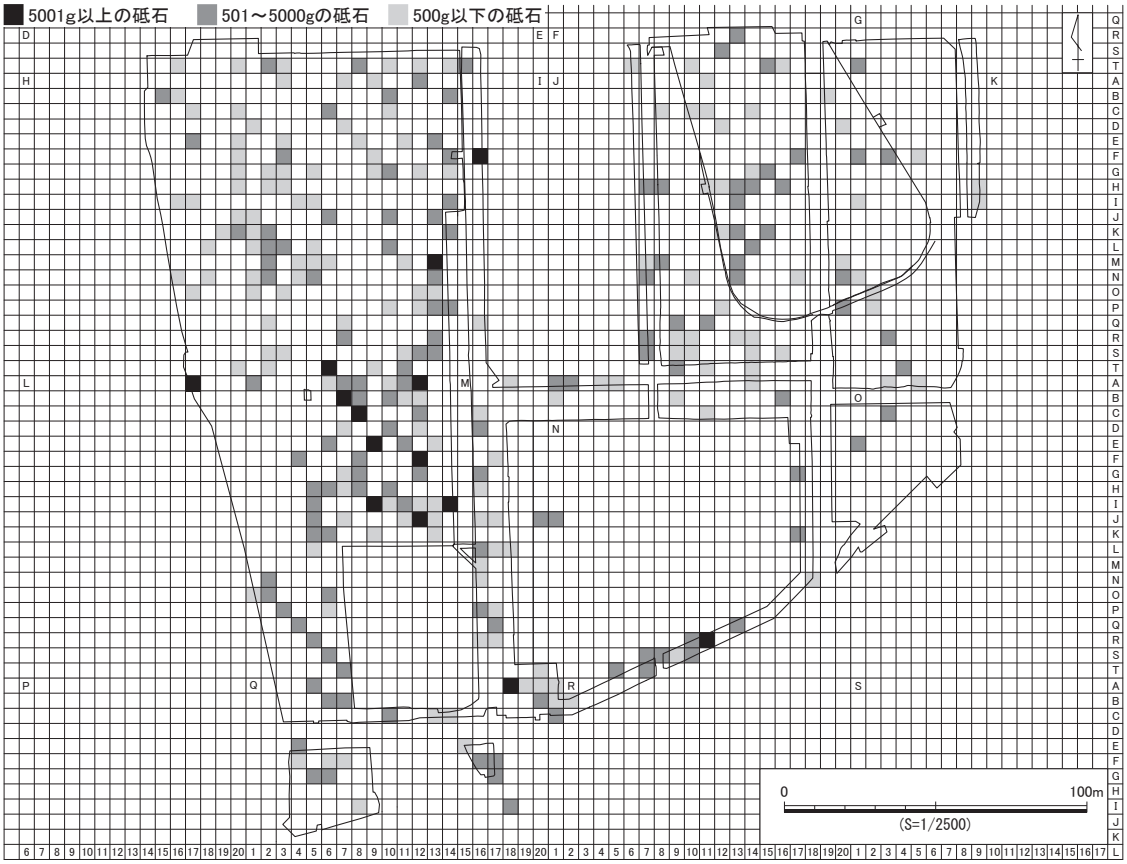


図３　砥石の重さで分けてみると・・・

（各グリッドで出土した砥石のうち、もっとも重いもので塗り分けました）